



一貫コース通信

『一年の計は元旦に在り』（ラインフォールド・ニーバーの祈り）から

あけましておめでとうございます。

新春を迎え、令和3年が災害にみまわれる事無く、生徒諸君に取り大きなおおきな実りある年であります様に、心から祈念します。

我が国の文化に『一年の計は元旦にあり』と言う気分があります。これは、年が改まる節目に、自分なりの決意を持つ大切さを教えています。実際の所、ヒトの能力の差など世評が言っている程大きくはありません。尽き詰まる所、決意と努力の差を才能と言っているに過ぎず、決意と計画、そして実践なくして結果などある筈がありません。人が拘る物事一般に対する理(ことわり)と言って良いでしょう。諸君も、この一年を充実した年にする為に、具体的に大きな目標と緻密な計画を立て、必ず行動に移して下さい。

昨年はルードヴィヒ・フォン・ベートーヴェンの生誕250周年の年に当たりましたので、ここで少し彼の生涯について触れたいと思います。ベートーヴェンは1770年12月6日に、ドイツ(当時の神聖ローマ帝国)のボンで誕生しました。生まれは祖父・父共に宮廷の音楽士なので、音楽を学ぶ環境は悪くはありませんでした。しかし、17歳で母を亡くして以来、失職した父や弟の為に家族を支える生活が始まります。当時のヨーロッパは時代の転換期に在り、1789年フランス革命の最中、ボン大学で学ぶ彼はカントの[純正理性批判]等も学び、ゲーテやシラーの詩にも長じ、何よりも啓蒙思想に強く共感を覚えています。更には、20代半ばから、音楽家にとって命とも言える聴覚に異常がみられる様になります。その苦しみに苛まれ、31歳の時には自殺を考え遺書を書いています。それでも彼は過酷な運命を引き受け、不死鳥の如く蘇ります。これ以後の十年間に交響曲2番から8番まで(『運命』は5番『田園』は6番です)を作曲していますし、私達が知っている多くのピアノソナタ(全曲で32曲)『熱情』や『月光』等も、失われて行く聴覚の苦しみの中で作曲されているのです。彼の、収入の殆どは家族の生活と、甥の養育に費やされています。また、曲風は力強く、古典派(主に宮廷音楽)の枠に縛られない、革命的で次のロマン派に繋がる新しい音楽を創造したのです。

ベートーヴェンの生涯は56年間ではありましたが、私は、先人が残してくれた文化を想う時、それ等から学ばなくてはならない理由の一つをここに垣間見る思いがします。

ニーバーの祈り (※ 若さの良さは、殆どのモノが自覚次第でかえる事ができる所にあります。)

- 【 かえる事のできるものについて、それをかえるだけの**勇気**をわれらにあたえたまえ。
かえる事のできないものについては、それを受け入れるだけの**冷静**さを与えたまえ。
かえる事のできるものと、かえることのできないモノを、識別する**叡智**を与えたまえ。】

— ラインフォールド・ニーバー —

